

福島に生きる

震災 原発

浪江町津島訴訟原告 飛田 実さん(80)

エチ子さん(75)



戦争体験を語る飛田さん夫妻

東京電力福島第1原発事故で福島県浪江町津島地域から茨城県城里町に避難している飛田実(ひだ・みのる)さん(80)と妻のエチ子さん(75)は「何でここに来たのかなあ」と望郷の念に駆られるといいます。

「二度にわたって大きく揺れた」東日本大震災。農業委員をしていたところ東通(青森県)、女川(宮城県)の各原発や青森県六ヶ所村の核燃施設などを視察したことがある実さん。情報が全く入らない中で「原発は大丈夫だろうか」と不安がよぎり「まだ・みのる)さん(80)と妻のエチ子さん(75)は「何でここに来たのかなあ」と望郷の念に駆られるといいます。

やり方国民無視

後に判明するのですが、津島地区は安全どころか同地区方面に放射能が拡散していました。国は、SPEEDI(緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム)の調査データでそのことを把握していたのに、住民には意図的に隠されていたのです。「国や東電のやり方は戦前

"漂流"再び 戦前と同じ

の大本営発表と同じ国民を無視するやり方だ」と実さんは怒ります。

3月15日早朝、全員で二本松市方面に向かいました。その後、猪苗代町、次男が住む岡崎市へと避難しました。

飛田さんたちの「漂流」はその後も続きました。岡崎市に1年、茨城県水戸市に1年、そして現在の城里町へと転々としました。

「幼いころに命の保証のない中国大陸を逃げまどったときと同じだ」と胸が痛みました。

実さんは、戦前に国策ですめられた満蒙開拓団として中国東北部の吉林省に移住した戦争体験があります。

母はアメリカ赤痢にかかり中国で死亡、兄はソ満国境警備部隊の通信兵として召集され、戦死しました。

生と死のはざまをくりぬけて1946年7月、京都府の舞鶴港に帰国。父親の生家のある福島県船引町(現田村市)に戻りました。47年の春、当時の津島村の国有林開拓のため入植。

くわ一つでの開墾でした。

高校卒業後、運送業、建築業などを営むかたわらモモ、ナシ、リンゴなど各一反歩の果樹園を造りました。

「高いところでは毎時7放射線量です。4年8カ月たっても「降りたくても帰れない。孫たちにとんなことを話して悔しさを伝えればいいのか」と心を痛めています。

「憲法の原点に」

幼少時に強烈な戦争体験をした世代です。

「侵略戦争をした日本。その反省にたつて平和憲法をつくった。この原点に立ち返るべきです」と強調する実さん。「日本はおかしくなっています。共産党の志位さんがいう戦争法を廃止する『国民連合政府』をつくらうという呼びかけは大歓迎です。私たちは戦争の苦難、原発事故の苦難と二重に体験しました。原発はゼロに、安倍政治は終わりにしないといけません」

(菅野尚夫)